

集



俳句フォーラム

2016年4月 第59号

白山句会

下町風俗資料

田中藤穂

漱石忌過ぎし上野に人多く
荒天の納めの句会晴れてきし
宙に満つ風の公園の落葉
昭和遠し暖房の下町資料館
伊豆榮に句の友五人年惜しむ

年明ける

浦川哲子

申年明ける昨日のことは既に去年
いのち有限総身に初明り
初手水武蔵の国の一の宮
到来の薯蕷饅頭大福茶
三ヶ日駅伝に明け暮れにけり

館

平野無石

小春日や貌変りゆく広小路
冬ぬくし雀餌食む腕の上
長火鉢帳場格子の招き猫
焼け跡から生きてきし街年の市
冬紅葉上野は今も民の街

桜紅葉

都築繁子

池の面に写して樹々の秋深し
ここよりは立入禁止小鳥来る
桜紅葉魚塚鳥塚眼鏡塚
枯蓮や陽のあたりたる白いビル
思い出す昭和春の資料館

冬ぬくし

植木やす子

杜鵑草路地にはみ出し招きおり
椎の実や足裏くすぐるざくざくと
腕かざし冬の雀を呼ぶ男
長火鉢下町文化の置土産
枯蓮を器用にくぐる番鴨

冬雀

大山夏子

ひょうたん池水面に漂う秋思かな
十月の空池底へどこまでも
弁天は蛇身におわす冬紅葉
蓮の萼高々と枯れ水の音
落葉吹かる天地の間吾も鳥も

国立科学博物館付属自然教育園

都築繁子

さわやかな秋晴れの十月九日、自然教育園に吟行した。JR目黒駅から十分たらずの、都内で自然の面影を残す数少ない森である。

隣の庭園美術館からこの一帯にかけて、室町時代には「白金の長者」と呼ばれた豪族の屋敷があった。その後、松平讃岐の守の下屋敷、さらに陸海軍の火薬庫な

どに利用され、戦後昭和二十四年に全域が天然記念物及び史跡に指定され、同時に国立自然教育園として一般公開された。

六万坪の広大な森は、シイ、マツ等の常緑樹や、コナラ、ケヤキ等の落葉樹がうっそうと茂り、静かな池や流れ、湿地や草原など自然の移りゆくまま、自然本来の状態が残されている。

目黒通り沿いの正門から一歩中に入ると、街騒がうそのように静寂が広がっている。入口の展示ホールを見てから園内へ。

見上げる大木の枝先に実がなっている。クルミの木とわかる。さっそく一句。

実を付けし胡桃を見上げ森深し

藤穂

路傍植物園の通りには木立の合間に茂った些細な草花にもひとつひとつ名前が表示されている。ユウガキク、フジバカマ、タイアザミ等々。小さな草花に近づいてカメラを向ける人もいる。

杜鵑草路辺にはみだし招きおり

やす子

森の中に土塁の表示があり、小高く盛られた土の上に植えられた椎の木が巨木になっている。これは四、五百年前、白金長者が外敵や野火を防ぐために築いたものと言われている。

杜鵑草土塁残りし屋敷跡

夏子

千年の火防ぎ土塁椎の実降る

無石

ばった跳ぶ火薬庫跡の深き森

無石

路には色々な木の実が落ちていている。無患子の実が羽子つきの羽子の黒い玉だと知る。

無患子は大なる木よ実を拾う

藤穂

ざくざくと足裏くすぐる椎の実よ やす子

昼の虫立ち止まる杖伝い来る

夏子

ここよりは立ち入禁止小鳥来る

繁子

物語の森と表示されたクロマツを見る。太い幹と枝振りが見事である。この松は江戸時代松平讃岐の守の屋敷の、ひょうたん池を含む回遊式庭園の一端であつ

たといわれる。

彫り深き黒松の肌あきあかね

無石

ひょうたん池には大勢のカメラマンが、熱心にカメラを向けていた。周りの緑の木々や空の青さが、透明な水に映って、神秘的な美しさであった。

池の面に写して樹々の秋深し

繁子

十月の空池底へどこまでも

夏子

水生植物園ではスキの穂、ガマの穂、吾亦紅、ノコンギク、ツリフネソウなど、多彩な植物が見られた。

水影をむつみほつれて秋の蝶

無石

穂すすきや湿生円の空広し

繁子

木の橋を渡りて出逢う吾亦紅

藤穂

いのこづちつけて家路へ急ぎけり やす子

天候に恵まれ森林浴に癒された吟行であった。